

## 母子の歯科保健に関する研究

分担研究者 岡田 昭五郎\*

### 〈リサーチ・クエスチョン〉

1. 幼児期をターゲットとした歯科保健対策として何を行うべきか。
2. 保母、幼稚園の教諭を対象とした歯科保健教育はどうあるべきか。
3. 歯科疾患ハイリスク乳幼児を見付ける方法はあるか。

### 〈研究目的〉

近年わが国の幼児のう蝕は減少してきているが、まだう蝕の多い地域もある。当面する母子歯科保健の問題点としては4～5歳児のう蝕予防に重点を置いて検討する必要があると考え、本研究班は幼児のう蝕予防対策を検討する目的で前述のリサーチ・クエスチョンのもとに研究を行った。

### 〈研究方法〉

1. 東京都中央区、岩手県平泉町で5～6歳児について地域における歯科保健事業への参加状況とう蝕発生状況について、retrospectiveな調査を行った。
2. 4～5歳児の歯科保健指導、う蝕予防処置の効果を調査するために、鹿児島県、岡山県、神奈川県、岩手県で歯の清掃を含む歯科保健指導、フッ化ナトリウム及びフッ化ジアンミン銀を使ったう蝕予防処置の臨地研究を行った。
3. 保母、幼稚園の教諭、保健所の保健婦等の職種の人を対象として、幼児とその保護者の歯科保健指導を行うために必要な知識を収めたマニュアル作成を行った。
4. 北海道内8地区で1歳児を対象としてカリオスタットによる歯垢の検査と7項目にわたる生活調査の組合せによってう蝕ハイリスク児を検出する方法について検討した。

### 〈研究結果〉

1. リサーチ・クエスチョン1について：

岩手県平泉町におけるretrospectiveな調査結果では、3歳以降のフッ素塗布回数

---

\*東京医科歯科大学 歯学部 予防歯科学教室

の多い者にう蝕が少ない傾向が認められている。東京都中央区における調査結果では、3歳以降の検診回数とう蝕数との間に有意な負の相関が認められ、3歳以降も健診やう蝕予防処置を継続して行うことが、効果的であることが認められた。

乳臼歯隣接面のう蝕は視診のみの診査では見落としが多く、慎重な診査を要求されることが示唆された。また、歯の十分な清掃やう蝕予防処置は早い時期から実施することが乳歯う蝕の予防効果を大きくする可能性が高いことが示唆され、3歳児健診に引き続いて健診やう蝕予防処置を継続して実施していくことが乳歯のう蝕予防に効果的であると考えられた。

## 2. リサーチ・クエスチョン2について：

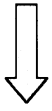
幼児やその保護者に歯科保健教育を行うには、保母や幼稚園の教諭等が知識を得るための歯科保健マニュアルが必要である。そこで、むし歯はなぜできるか。どうしたらむし歯予防ができるか。等の内容を含むA4版9ページのマニュアルを作成した。

## 3. リサーチ・クエスチョン3について：

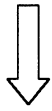
1歳児約700名についてう蝕ハイリスク児検出の調査を開始した。実施した場所は地域によってう蝕増加にかなりの違いがあるので、う蝕ハイリスク児のスクリーニングレベルの設定は画一的に決められないのではないかということが予想されている。

### <今後の課題>

1. 岩手県、神奈川県、岡山県、鹿児島県において保健指導と予防処置を実施している幼児たちのう蝕予防効果の調査を今後も継続することにより、十分な成果が得られることが期待される。
2. 今年度作成した歯科保健に関するマニュアルはわが国で初めて作られたもので、保母たちが十分理解して活用し得るか否かについて今後調査する必要がある。そして、その結果によってはよりわかりやすいマニュアルに改めていく必要がある。このマニュアルによって保母たちが歯科保健に関する知識を得て、保育所や幼稚園で幼児やその保護者に歯科保健教育を行い、幼児がよい生活習慣を早くから身につけていくことが期待される。
3. 北海道で実施している調査を継続して行い、う蝕ハイリスク乳幼児のスクリーニング方法を確立することは、重症のう蝕をもつ幼児を減少させるうえでの期待が大きい。
4. 現在3歳児までの歯科保健対策は多くの地域でかなり徹底して行われているが、それ以上の年齢の幼児では比較的対策がおろそかである。また、幼児のう蝕罹患の程度は地域差が著しいことも指摘されており、それぞれの地域で、乳幼児から就学まで一貫した歯科保健対策をどのように展開すればよいかということが次の課題である。



**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



リサーチ・クエスチョン

1. 幼児期をターゲットとした歯科保健対策として何を行うべきか。
2. 保母、幼稚園の教諭を対象とした歯科保健教育はどうあるべきか。
3. 歯科疾患ハイリスク乳幼児を見付ける方法はある。

研究目的

近年わが国の幼児のう蝕は減少してきているが、まだう蝕の多い地域もある。当面する母子歯科保健の問題点としては 4~5 歳児のう蝕予防に重点を置いて検討する必要があると考え、本研究班は幼児のう蝕予防対策を検討する目的で前述のリサーチ・クエスチョンのもとに研究を行った。